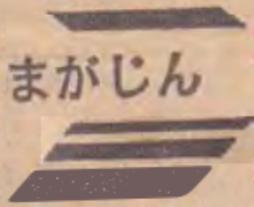


特集は「軍拡時代を憂う」。
このうち中嶋福雄「『新しい冷戦』の国際学」は、八〇年代を国際緊張のなかでの相互依存の深化の時代ととらえ、冷静な日本
の選択を訴えている。

現在の国際情勢を「冷戦」の再開と見るべきかについては、
専門家の間でも意見が分かれて

5.30
180
8月9日



「世界」
(6月号)

いる。これに対し中嶋は「緊張緩和」も基本的には冷戦構造の一形態だったとの認識を踏まえ、現情勢を「新しい冷戦」ととらえる。そして五〇年代冷戦との相違については、米国の軍事的優位の崩壊、東西両陣營の分極化、第三世界諸国の多様化、さらには何よもやも各陣營、各

国間の相互依存の深化に求めるのである。

ここで強調されているのは「新しい冷戦」というリアルな情勢認識に根ざしつつ、国際的相互依存の力学を生かした平和システムを追求することである。そして日本にとっては対ソ外交へ英知を注ぎ、米国のヒステリックな対応を抑制させるのが、当面の課題だという。

藤井治夫、阪中友久らのシンポジウム「第二再軍備時代」は、七八年のガイドライン(日米防衛協力の指針)決定以降を戦後第二の再軍備時代への突入と見なして討論。このなかで福島新吾が「軍拡」による産業構造、社会構造の変化に対し警告しているが、こうした変化が多くの場合に不可逆的であるところに「軍拡」の真の危険性がひそんでいるといえよう。岩波書店。